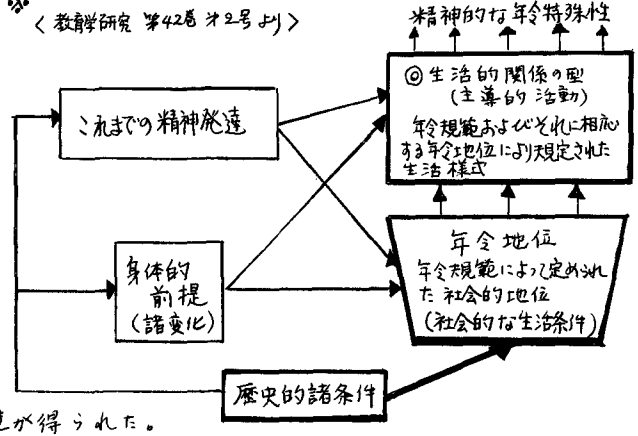
C—2 発達過程と生活構造

静岡大教育　○金田利子

目的　人間はいうまでもなく発達的存在である。生活構造についても発達過程ぬきには論じられない。しかし、これまで人間一般を対象とした生活構造論が多い。ここでは、人間の発達過程における主導的活動の交替がどのように全生活の関係構造を変えていくかについて基礎的検討を行う。(このことから、内面的発達とその内容を含むライフ建設論を導く。)

方法　生活構造における発達的変化を理論化した人にA．コサコフスキー※(東独)がいる。ここでは、日本の生活者(幼児，小学低学年，高学年，中学生，高校生，成人，老人)の内面的ねがいを投影的手法(三つの願いテスト)で調査し、コサコフスキーの説を参考に歴史的・社会的および発達的、年令的地位・条件と内面との関連構造をさぐる。

結果　コサコフスキーの理論は大むね日本の現実にも適用しうること及び年令と生活との関連の基礎が得られた。

※〈教育研究 第42巻 オ2号より〉